

日本記者クラブ主催 自民党総裁候補討論会

平成一九年九月二一日(金)午後一時 三時
日本記者クラブ(内幸町プレスセンタービル)

麻生太郎所見発表演説
衆議院議員 麻生太郎

麻生太郎です。

まさか同じお招きを、この短期間で二度も頂くとは、ちょっと想定外でした。

本日もどうぞ宜しくお願いします。

わたくしの所信を申し述べます。

私は、「小さくても温かい政府」、「小さくても強い政府」を作りたいと申し上げております。

名目成長率にして、少なくとも二%以上、「FPO」の伸びを追求すると申しております。

「活力ある高齢化社会」といついとも、申しあげております。

また中国との付き合いを聞かれたときは、「日中共益」つまり、「中国とは共益だ」と申しております。

それと、「地方分権」、「地方に経営感覚を」といついともしきりに申し上げます。

わたしの歴史観、信条を語ります

今日は、いま申しました公約について、全然、違った角度から説明いたします。

まず、わたしが政治信条といたしますところは、「ひまるところ」「日本人への信頼」、であります。

有史始まってこの方、日本ぐらいではないでしょうか。
切れ目のない伝統を保持しております。

一つの国家として、自主独立の道を嘗々と歩んできた国家だと存じます。

危機に臨んで、外国勢力に学ぶことはあっても、引き入れるということはしておりません。幕末の危機に際してさえ、そうでありました。

天皇家におかせられましては、その間、男系の皇統を、ずっと維持しております。

我が国の歴史には、お蔭さまで、一本、太い大黒柱が通っているわけであります。

保守すべきは保守、改革すべきは改革

これほどまでに、今様の言葉で言つとサステイナビリティ、持続可能性といったものを、体現して見せた国といたものが、ほかにあるだろうか。

歴史を通じて、国柄といたものを維持して参ったのが、わたしどもも、日本であります。

人間、じっと、同じじつこの姿勢で立つていこうとは、よほど鍛えた筋肉をもつ人でも、そうそうできません。

日本という国は、たとえば言えば、二千年、それをやってきた

国である。

足腰が、よほど強い国である。

保守すべきは保守し、危機に臨んで改革すべきは改革してきた。

そのことに先人達は文字通り、命をかけてまいりました。わたしには、そう思えます。

中国の台頭をなぜ大歓迎するか

よく「中国の台頭で、日本は負ける」といった類の論調が出て参ります。

わたくしはこの種の話があまり信用できません。

中国の台頭といた現象を見まして、「大歓迎」と、本心で思いました。

なぜなら、日本という国は、強い相手が周りに現れますと、先方のいいところを吸収し、必ず自分の力で、脱皮をする国であります。

ですから、中国とは、「共生」といふより、「共益」、つまりお互い益するといふ関係にならねばならぬ、と、信じております。

なにせ、持続性においてすぐれた国でありますから、国家経営の模範といたものも、必ずするよつなものが、実は過去の歴史

にもございます。

江戸にあった「小さくても温かい」政府の模範

例えば江戸の街。人口百万の都市を統治する。今で言えば行政や司法の仕事をみな担当していたのが、大岡越前などでおなじみの江戸町奉行所であります。

その奉行所で働いていたお役人は、何人くらいだったと思われますか。

わずか「三百人弱」。百万都市に、三百人だったんですよ。

それでいて、幕末日本に来た外国人は、江戸の清潔ぶりとか、老いも若きもニコニコとして、機嫌よく暮らしていたところに、驚いております。

たった三百人という、まあ小さな政府としては、究極の小さな政府。

その小さな政府が、同時に、温かい政府でもあったのです。

それはほとんどの、今なら区役所がしているような仕事と、いつのは、全部、民間人がやっていたからです。その多くは、「隠居さんたちです。」

江戸時代というのは、究極の、民間活力、ボランティア全盛期で

す。活力ある高齢化社会」です。

このあたり、総務省が出した資料では、六五歳以上の高齢者が、二七四四万人。

しかしそのうち「介護」か「支援」が必要な人口は、別の統計によれば一六・六%ですよ。大多数の高齢者は、元気なんです。

昨日、六七回目の誕生日を迎えたわたしにしてからが、一年に二回も、しんどい総裁選を戦えるわけです。

活力ある高齢化社会」には名目二%の成長が必要

この人たちを、「税金を使う人」でなく、「税金を払ってくれる人」にしたい。できるはずだ、というのが、私の言う「活力ある高齢化社会」であります。

そしてそのモデルというのは、わたしども一度、二百年以上にわたって、やったことがあった、ということでもあります。

今、高齢者の約六割が働く会社は、従業員数三〇人未満、いわゆる零細企業です。

したがって、わたしは名目成長率で見て、二%以上の成長が必要だ、と申している次第です。

高齢者を吸収してくれる零細企業に、しっかりしてもらわねばならぬ。その点だけとりましても、成長重視は大事だと、思っ

おります。

また、地方の会社に頑張ってもらわねばなりません。その環境づくりとか、方向づけとか、地方の首長さんにやってもらわなければならないと存じます。

権限と、財政面での裏づけと、人材を工面してさしあげる必要が、あるかと存じます。それによって、地域を経営していただく。

漫画のルーツは江戸の子ども文化

もう一度江戸の話です。

江戸の世というのは、子どもを遊ばせていた、子どもを子ども扱いしておりました。

何を当たり前なとおっしゃるでしょうが、同時代の世界に、そんな国は一つとありません。

桃太郎、一寸法師、浦島太郎。子ども向けの物語が、あんなに早くからあった国というのは、ほかにあるんでしょうか。

ちなみに、大人向けではありませんが、あの「グリム童話」は、発表が（一八一二年）であります。

私はこれが、文化の土台としてあったから、昭和に入って大恐慌になった時、ある偉大な失業対策事業が、全国に広まったんだと存じます。

それは何かといえば、「紙芝居」です。失業者が、手軽にできる仕事でした。

紙芝居は、シネマの技法ですよ、あれは

映画のやり方を、取り入れている。そうして全体が、ストーリー。物語になっている。

これを、わくわくして見た世代が、どういつ世代か。

戦後漫画のパイオニアになった、偉大な作家たちの世代です。だから、ストーリー漫画という、それまで世界のどこにもなかった独特のジャンルが生まれました。

映画の技法を駆使した、文法が生まれました。

それがいま、ドラゴンボール、キャプテン翼、等々になって、世界中の青少年を、熱狂させております。

どうでしょう。日本にある物は、長い長い歴史の熟成を経ております。

もういい加減、日本人の持つ、日本文化の持つ、この種自発的な創造力、新しいものを作る力というものに、信頼を置いていい時代だと、わたしは思います。

改めて述べます。我が国は脈々と引き継ぐ伝統に誇りを持ち、
変えるべきは、勇気をもって改革、新しきを創造していくことが
出来る国家なのだ。

幕末の志士たちのごとく、私も、お国のため、国家のため、文字
通り命を賭けて参る所存です。
有難うございました。

了

参考文献

徳川恒孝『江戸の遺伝子・いまこそ見直されるべき日本人の知恵』(二〇
〇七年、PHP研究所)

竹内一郎『手塚治虫「ストーリーマンガの起源」』(二〇〇六年、講談社)

平成 19 年 9 月・自由民主党総裁選挙における
麻生太郎全演説
平成 19 年 10 月麻生太郎事務所発行

【議員会館】

〒100-8981
東京都千代田区永田町 2-2-1
衆議院第一議員会館 210 号室
電話：03-3581-5111（代表）

【筑豊事務所】

〒820-0040
福岡県飯塚市吉原町 10-7
電話：0948-25-1121